

祭祀される忠度の腕

—— 伝承を引き寄せる場をめぐって ——

はじめに

「平家物語」の形成段階において伝承の関与があつたことは柳田国男氏以降、研究の中で度々取り上げられてきた。一方で、「平家物語」はテキスト成立後にも能・幸若舞曲・歌舞伎・浄瑠璃などで繰り返し題材として取り上げられ、広範な影響を及ぼした。またそれらの「平家物語」流布以後に在地に根付いた、あるいは生成された伝承も数多くある。

一の谷合戦において非業の死を遂げた平家方武将の碑も、神戸を中心に数多く残されている。その中で今回は忠度最期譚にまつわる在地伝承を取り上げてみたい。

覚一本「平家物語」巻第九「忠教最期」によると、薩摩守平忠度（覚一本における表記は「忠教」）は一の谷の合戦において西手の大將軍として活躍したが大敗を喫し、落ち行くところを敵方の岡部六弥太忠澄（覚一本における表記は「岡辺六野太忠純」）に追いつかれ、取り組み合いとなる。熊野育ちの大力とされる忠

大坪 舞

度は岡部をわずか三太刀で組み敷きその首を掻こうとするが、追いついた岡部の童に片腕を落とされる。忠度はもはやこれまでと覚悟を決め、西に向かつて十念を唱え終わる前に、岡部によって首を落とされる。最期まで名乗らなかつた彼の名を敵方に知らしめたのは、腋に結び付けられた「ゆきくれて木のしたかげをやどとせば花やこよひのあるじならまし」の一首であつた。この名高い歌人としてのエピソードと、熊野育ちの大力とされる忠度の武人としての一面が対比され印象的な最期譚である。

忠度が勇猛な武将であり、その忠度が非業の死を遂げたことは平家各諸本共通する叙述である。延慶本では、忠度は念仏を唱える間もなく討たれ、覚一本では念仏を唱え終わる前に首を落とされる。盛衰記を除く諸本では、忠度は念仏を唱えない、あるいは念仏を唱えることなく首を討たれる。腕を切られるという、武将として戦う力を削がれた後の非業の死といえよう。

北川忠彦氏も論証されたように、忠度像は時代を経るごとに平家一門第一の歌人としての地位を獲得していき、覚一本では

明らかに歌人としての像が完成している。その歌人としての像を生かした形として世阿弥自身が「上花」と称した謡曲「忠度」では、「和歌の家に生れ」た忠度は和歌への妄執ゆえに怨霊と化していくことが注目される。歌人忠度の像はここに結実するといえよう。

忠度は政治的に重要な役割を担った人物ではなかったため、その描かれ方は美麗であり、覚一本や謡曲「忠度」においてその歌人としての像は完成されたが、土台としては常に武人としての側面が意識され、一面が対比されることによって忠度の最期はより鮮烈に彩られる。

『平家物語』に取材した謡曲や歌舞伎・浄瑠璃などにも忠度は度々取り入れられる。物語の本流ではない、いわば傍系の忠度は、それゆえに清廉な歌人としての像を持つことができ、題材として取り入れることが容易であったのだろう。その最期は重衡のように平家の罪業を一身に背負っていく人物としては描かれず、『一谷嫩軍記』などにも代表されるように、後世悲劇の主人公としての役割を付されていく敦盛と共に取り上げられることも多く、忠度に対する諸衆の関心は相応にあったかと思われる。

さて、忠度が最期の間に切り落とされた腕が埋められたという腕塚が神戸市長田区駒ヶ林と明石市天文町（旧右手塚町）に伝えられている。両地共に付近には忠度の胴を埋めたとされる胴塚、忠度塚があるものの、ある側面では腕塚が重視される傾向すらある。忠度が腕を切り落とされたという叙述は四部合戦状本を除く各諸本

に共通し謡曲などにも採られるが、物語の中で切られた部位が在地で祭祀されているという例はそれほど多くはなく、注目に値しよう。本稿では神戸・明石に残された在地伝承を中心として忠度の腕を特別に祭祀するという意義を考察していきたい。

一、忠度の腕塚

『平家物語』内で忠度は一の谷西手から、四部合戦状本は明記しないものの漠然と西に、延慶本、長門本は一の谷から西へ、芦屋へ、『源平盛衰記』ではかるも河・須磨・板宿を過ぎて西へ、南都本や中院本には明石を指して落ち行くことが記される。

現在忠度伝承が残されている地は、長田区駒ヶ林と明石市天文町（旧腕塚町）である。しかし、忠度の死地は『平家物語』諸本でも錯綜しており、事実上でも確定できない。

駒ヶ林の忠度伝承は延宝八年（一六八〇）成立の『福原びんかみ』の「忠度塚」の項に

駒ヶ林ヨリ壱丁西

ふるい塚に啼虫やたゞのりの声

目録

とあるものに遡ることができる。駒ヶ林には、現在腕塚と胴塚が残されており、どちらも「忠度塚」という名で呼ばれることがあるが、ここである「忠度塚」というのは「駒ヶ林ヨリ壱丁西」とあることから、駒ヶ林中町にある現在の腕塚堂とは地理的に違う場所である。おそらく駒ヶ林の西隣である野田町東端にある胴塚のことを指してい

と思われる。駒ヶ林における腕塚の初見は、時代ははるかに下って明治四四年（一九一）の『西撰大観』である。ここに、

今の腕塚を斯く改築して碑を立てしは、凡そ五十年前の事といふ

と少なくともこれから五十年前には腕塚堂があったと記されているが、それはおよそ文久年間のことである。また、寛政八年（一七九六）年成立の『摂津名所図会』の「薩摩守忠度塚」の項に、駒ヶ林の中にあり。塚上に五輪の石塔を居ゑたり。「異平家物語」には、忠度唯一騎、明石をさして落ちられけるに、岡部六弥太忠澄追つかければ、取つてかへし、ひき組んで討たれ給ひし由見えたり。明石の墓のあるべき證と覚ゆ。土人云く、明石にあるは腕塚なりとぞ。

とあることや、文化元年（一八〇四）成立の『播州名所巡覧図会』の「薩摩ノ守忠度塚」の項にも、

駒林の中にあり。石塔を居たり。但し、忠度の腕塚は明石に有て、腕塚町ともいへり。

と書かれており、駒ヶ林の忠度塚は「腕塚」ではないようである。現在、駒ヶ林には「腕塚町」という地名も残っているが、これは近代以降つけられた町名らしく小字名には「腕塚」に類するものはない。駒ヶ林の腕塚伝承は現代でこそきらびやかな堂宇が建てられ、信仰を集めているが、文化元年（一八〇四）から文久年間（一八六一—一八六三）までは広く認識されていたという痕跡は見られない。

対して、明石で最も古い忠度の墓地があったことを示している

資料は大久保時代（一六三九—四九）成立の「播州明石城図」に忠度墓がのっているものである。この「忠度墓」は現在の忠度公園にはば対応する。

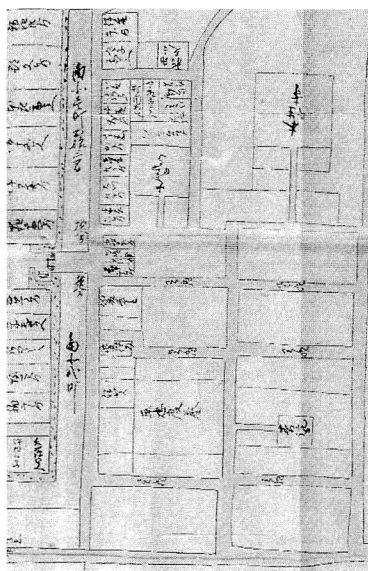


図1 「播州明石城図」



図2「摂津名所地図」

寛文七年（一六六七）に成立した『摂津名所地図』¹⁰では、松樹の下に描かれた五輪塔に「忠度塚」という名が付されている。この箇所の記事は、

忠度最後所ハ摂州駒ヶ林ニ有森長源八死骸を大蔵谷へ上ルト
清水記ニ有由大蔵谷忠度塚ノ上ノ石塔六拾年前ニ有之候生駒
甚介殿舟上ニ城御取立ノ節退轉仕候明暦三年ニ城主忠國公石
碑ヲ御立被成其御哥ニ
今もたゝのりのしるしにのこる石のこけにきさめる名のみく
ちせず

と忠度塚の成り立ちについて詳細に書かれている。生駒甚介とは生駒親正であり、親正が船上城に取り立てられた際に忠度塚も退

祭祀される忠度の腕

転したという。これが六十年前のことと書かれているので一六〇〇年初頭に忠度塚は現在の場所に定められたものであろうか。明石の忠度塚の伝承は中世末までたどることができる¹¹と推察する。明石にも駒ヶ林と同様、現在腕塚と忠度塚があるのだが、「腕塚」という名前の初見は、寛文七年（一六六七）成立の『海瀬舟行図』¹²である。この図の「薩摩守平忠則」の左方に「ウデツカ」という文字が確認できる。

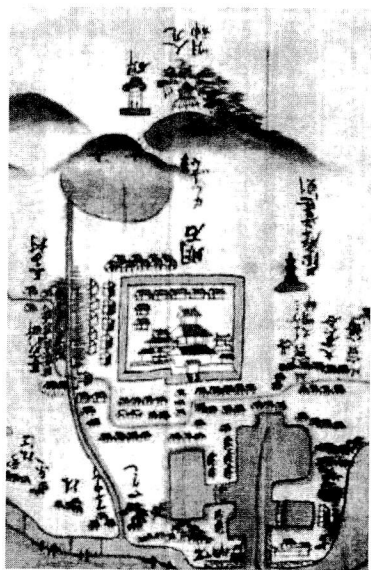


図3「海瀬舟行図」

また、元禄五年（一六九二）成立の『采邑私記』¹²「腕墳」の項に、
埋平忠度之腕于此云今猶累々近忠度之墓此所有歩」卒
之舎曰腕墳

と書かれており、「うでづか」という町名もこの時期にはあったらしい。腕塚伝承としては明石が先行するのであろう。

さて、それでは明石における忠度腕塚伝承の特色を見ていこう。腕が埋められたとされる忠度塚と腕塚とはまったく同一の性格を持つものではない。先に挙げた『摂津名所地図』によると、忠度塚は生駒親正の関与があったらしきこと、明石城主松平忠信の歌が当時からあったことが読み取れる。現在でも忠信の歌や梁田蛭巖による碑が残されており、さらに『明石名勝古事談』によると旧藩時代忠度塚の裏に塚の番人が住んでいたらしく、藩の庇護を受けて、他の平家碑などと同じようにいわば記念碑的役割が強かったことが見受けられる。特に忠信が『源氏物語』にまつわる伝説の保護にも力を入れたことなどからも、明石という地が文学的要素の強い史跡を受け入れるだけの素養があったことは確かであろう。

対して、腕塚に関しては藩による保護はほとんど見受けられない。かといって巷間に軽視されていたかというところでもなく、『海瀬舟行図』では忠度塚だけでなく「ウデヅカ」も描き、駒ヶ林側の資料を見ると、明石の忠度塚が載せられることはないが、腕塚があるのは意識されている。腕塚という腕を祭祀する信仰形態は、外部の者の目にも特異に映ったことであろう。現在でも腕塚の祠内にある腕の模型で患部を撫でると痛みがとれると信じられている。これは忠度塚には見受けられない特徴である。この病平癒の信仰は御霊信仰と重なるところが多く、かつては腕塚に病

平癒の祈願として石を積み上げていったという。神戸の腕塚堂にも石を持ち込む習俗はみられる。疫神として祭祀される御霊忠度の影は腕塚にこそ色濃くみられるのである。

宝暦年間に書かれた『播磨鑑』¹⁾「大蔵谷」の項に注目すべき記述がある。

〔往還板橋〕人丸裏道坂道ノ切門ニ有 俗ニ両馬橋ト云 此流ヲ両馬川ト云 忠度 六弥太此所ニテ組計之所也ト云 橋ヲ両馬ノ橋ト云

人丸社の裏から降りてくる坂道の切門の両馬川に往還板橋、俗に両馬橋と呼ばれる橋がかかっており、その橋のところで忠度と六弥太が組み討ったという。これは『平家物語』にはない明石独自の伝承である。平家テキストをそのまま用いたものではなく、明石という在地の風景と響きあいながら新たな伝承が生まれていったことを考える上でも興味深い。稿者のフィールドワークにおいても、現地住民に忠度の話を探ねると必ず両馬川の名が登場した。明石村と大蔵村の間を流れる両馬川の畔で忠澄に追いつかれ一騎討ちとなり、腕を切られたところが腕塚で、そのまま南下して忠度塚のあたりで首を切られたという。「両馬川」という名前の由来も、忠度と岡辺六弥太がこの川をはさんで対峙したことだという。白洲雅子氏によると両馬川の「両馬」は謡曲「忠度」にこれこそ望むところよと思ひ、駒の手綱を引つ返せば、六弥太やがてむずと組み両馬が間にとうち落ち、かの六弥太を取つて押へ、すでに刀に手をかけしに、

とあるものに由来するということだが、両馬川は同時に「両端川」¹⁵とも呼ばれ、中世より宿場町であった大蔵谷と、明石城下の境界地であった。

両馬川は現在暗渠となっているが、文久三年の「明石町田全図」¹⁶には確かに溪谷から流れ出、大蔵谷村宿場と明石村の境界に沿い海に滔々と流れこむ様子が描かれている。太寺付近を水源とし、暗渠となった今も両馬川沿いには水音が響いている。明石城築城の際に川の付け替えが行われたのではないかということは古くから言われており、金井智氏は明石川の付け替え異伝を「明石の誕生」¹⁷の中で、明石川は古くは城の南を東流し、腕塚付近で両馬川に流れ込んでいたのではないかと考察している。同書で書かれている腕塚は山陽電鉄の高架工事により移転される前の腕塚で、現在の腕塚神社の西北西一〇〇メートルほどの場所にあったものである。腕塚のあたりに両馬川の痕跡があり、水流が微量になったが、両馬川河口に明石湾から流砂が押し寄せ、両馬川が埋め去られていく状況をボーリング調査の結果をもとに論考しているのは興味深い。現地に行つて地形を考えてみても、築城により整備される以前は太寺付近から流れ出た両馬川は溪谷に沿い流れ、山陽電車丸前駅のあたりから西流して腕塚付近を通り、「播州明石城図」の忠度墓付近、現在の忠度町の忠度公園のあたりを通過していたのではないかと考えられる。忠度伝承の痕跡は現在よりもっと両馬川沿いに点々とあつたのではないか。

また、延享五年（一七四八）成立の『播磨諸所随筆』¹⁸に、

一、忠度墓 足軽町有。

一、同腕塚 同

と腕塚・忠度墓共に足軽町にあることが記されている。腕塚のある腕塚町は明石城東の外堀東側郭外に位置し、明石藩の家士・足軽が居住する地域であつた。このあたりが身分の低い足軽町とされた一因には、腕塚町付近は元来湖沼地帯であり、最近になつても掘れば水のであることが挙げられる。

忠度の伝承は水辺の風景の中に息づいている。

二、明石の精神風景

腕塚のある場所は明石と大蔵谷の境界上に位置している。大蔵谷は中世から西国街道沿いの宿場町であり、人の往来も多い地である。現在でも腕塚付近は明石町でありながらも大蔵谷の稲爪神社の氏子になつてゐることなどから、大蔵谷と明石の境界地にあつたことがうかがわれる。藩政時代も軽罪のものはこの付近で鞭うたれ追放されており、境界地としての性質が強い土地であつたのである。

大蔵谷と明石の境界付近から、もうひとつの境界である明石海峡を望むように建立されているのが人丸神社である。柿本人麻呂を祀る人丸塚は明石城築城の際に明石城内から人丸山に移されてきたといわれている。近世明石の人丸神社には火伏せの神としての信仰が強く、修験の関わりも指摘される。一方では盲人の神と

しての信仰も集めていたようで、境内には九州からきた盲目の僧侶が突き刺したとされる盲杖桜がある。眼病平癒の伝承は延享年間や寛政年間のももあり、近世には盲の神として陸海両面での交通の要所であった当地に参拝客が多かったことをうかがわせ、盲杖桜の伝承はその中で平家語りする琵琶法師の存在をも想起させるのである。

腕塚は人丸神社のふもとにある。「平家物語」にまつわる忠度伝承が一の谷から至近ともいえない明石に根付いたことの理由のひとつには、人丸神社のふもとであり盲目の琵琶法師が足を止める地であったことも考えられよう。

さらに、両馬川を挟んだ腕塚の東にはかつて蛇ヶ池と呼ばれる池があったという。これは、『明石名勝古事談』『蛇ヶ池』の項に、

休天神社の西田圃の中、乃ち第二小学校運動場の側に古き池あり、蛇ヶ池と云ふ。此の池は有名な池にて、一の谷の役以下戦死者の死骸を洗ひし処なり。又推古天皇の時の鉄人の死骸をも洗ひたりとも伝ふ。今は往時のまゝ、の池は残らねど其跡は残れり。

とあり、平家以降戦死者の死骸を洗っていたところだという。大正期までは僅かながらも残っていたようであるが、現在は宅地化され痕跡は見られない。戦死者の死骸を洗う蛇ヶ池がある当地は、境の葬送地として意識されていたのであろう。その起源が「一の谷の役」とされていることは、忠度伝承との関連も

感じさせる。

なぜ明石に忠度という御霊が祭祀せられるにいたったかを考える上で看過できないのが、蛇ヶ池でその死骸を洗われたと書かれる稲爪神社の鉄人伝説である。孝靈天皇を祖とする伊予国司益躬が三韓から来襲してきた鉄人を、蟹坂を過ぎ須磨明石の浦辺で討ち、その後大蔵谷に社を勧請した。これが『予章記』の巻頭に載せられる話である。現在でも十月の秋祭りである牛乗りの祭りの中で牛に乗るものを小千益躬としているが、『播磨鑑』の中でも伊予三島明神を勧請し、その神子を河野氏とする。田中久夫氏はなぜ大蔵谷の稲爪神社と伊予の河野氏がこれほど深く関わったのかということについて、瀬戸内海の覇権を握っていた河野氏が最前線基地が大蔵谷であることを主張した行事であると述べられている。確かに明石・大蔵谷は海上を見渡しても交通の要所であり、航海にも注意を要する海域であった。近世の明石海峡については『海瀬舟行図』に

- 一、播磨灘ヲ明石迄上リテ乗トムル明、西風ツヨク、明石ノ内工入事不成時ハ、淡路ノ岩屋ヘ直シテ懸ル也
- 一、此瀬戸、上下共ニ高砂迄ノ間ハ、白ミ黒ミノ間ヲ乗事習也
- 一、モト明石古ハトノ石、夜中ハ見エ兼ル、是ニ乗カクシハ大事也
- 一、此瀬戸ニ播磨地ト淡路地ト汐ノカハリアリ、是ヲ別道汐

ト云ナリ播磨地下リ汐ナレハ、淡路地ハ上ノ汐也、是ヲ知ヘシ

一、明石ノ川ノ口、大西風ニハ、砂ヲ吹ヨセテ埋ム故ニ、出船不成事有

一、明石ノ湊ハ奥ニ川ヲシカケタル池アリ、大西ニ堤切シハ水一度ニ湊エヲシ出事アリ、カ、リ舟心得アリ

と記されていることからもうかがえる。大森亮尚氏は人丸神社も海を向いており、海峡の神として祀られていると指摘される。田中氏は『明石名勝古事談』の稲爪神社の背後に運河状態の両馬川があったとする記述に着目し、稲爪神社の背後に避難港があり、それが稲爪神社の重要性を高めていたと考察している。両馬川が明石城築城以前に運河としての役割を担っていたとの過程は確たる証はない。しかし、少なくとも、『明石名勝古事談』の書かれた大正の時代でも両馬川が主要な川であったと目されていたことは注目に値しよう。

両馬川は人丸裏坂道の切門のあたりを流れ、かつては稲爪神社との関わりも意識される川であった。この川が流砂により埋められていったということには、かつて川としての機能が備わっていたときには海上からの漂着物が流れ着く地であったことも想像される。金井智氏によると、その川が湾曲しているのがちょうどかつての腕塚のあたりであった。同じく両馬川を機軸としている稲爪神社が海を隔てた伊予国の神を祭祀し、鉄人が倒されその首を洗ったとされる伝承を持つ地であることを鑑み

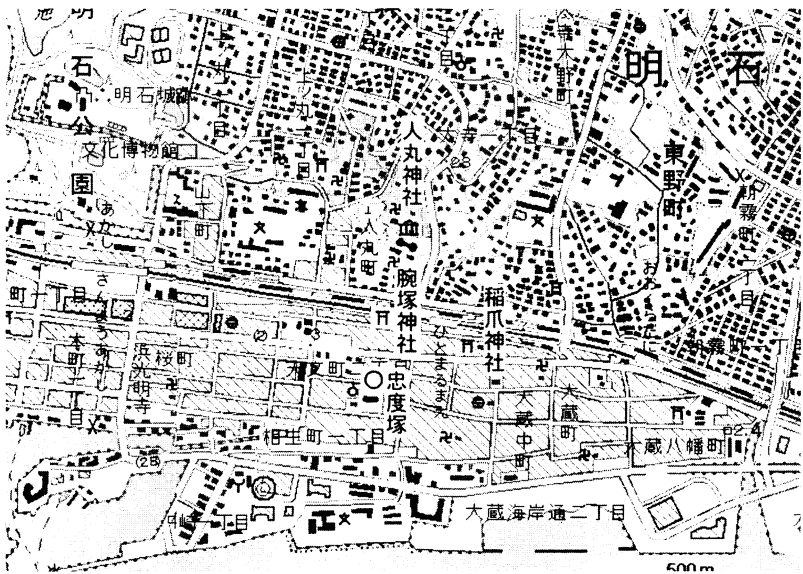


図3 国土地理院発行2万5000分の1地図より稿者編集

ても、忠度腕塚はただの平家伝説のみにとどまらず、海のかなたからたどりつくモノを祭祀すべき場であつたと考えられるのである。

三、水辺の腕切

忠度腕塚と同じく武將が腕を祀られているところに、安倍貞任の腕守社がある。これは、京都府南丹市八木町の船井神社の境内で小さな社が構えられ、その裏に鎌倉後期から室町期の作とされる宝篋印塔がある。衣川欄の戦いで破れた貞任の腕を卜者の易によつて川のある土地に埋めるよう進言されたため、古くは現在の船井神社近くの腕森という笹の茂つた森に埋めたのを明治の初めに船井神社に移したというものである。船井郡八木町の土地柄を考えると、この一帯は古くから、桂川の水運の船着場であつて、船井神社は水上航行安全の守護神が祀られている。ダムが建設された現在でこそ大きな水害はないが、昭和初期は大規模な水害が何度も起こる地だつたという。

武將の手と水の縁が深い伝説には、京でさらされた首が関東へ飛び帰る途中で力尽きて落ちたという将門伝説の中にもある。将門の手が落ちたという伝説を持つのが栃木県足利市五十部町の大手神社である。手の病氣がある人や機織りをする人が神社の根元から湧き出る清水に手をつけると願いがかなうと言われ、成就すると手を描いた絵馬を奉納するという。

また、広島市安佐北区の観音寺跡にある清泉には、有田合戦で戦死した熊谷元直の腕を妻が戦場から持ち帰り清めたという伝説がある。戦死した元直の亡骸を放棄したまま帰つてきた家臣に怒りを覚えた妻が自ら夫を探しに戦地に赴く。折り重なる死骸の中で元直の証となつたのが、腕に残された幼少時の腫れ物の痕であつた。女の身で夫の遺骸を持ち帰ることはかなわず、夫の腕のみを切り取り持ち帰つた。熊谷氏の菩提寺であつた観音寺の池で血にまみれた夫の腕を洗つたということで、この池は「清泉」とも「血洗いの池」ともいい、目を洗うと眼病が治るとも伝えられている。この妻の名は一説には蛇姫といい、清泉の前にある五輪塔のいづれかに元直の腕が埋められていると目されている。病平癒の信仰は忠度腕塚に通じるものがあり、家臣に打ち捨てられた元直の怨霊が御霊として祭祀されたものともいえるようか。妻の名を蛇姫とする伝承は、妻が水辺で祭祀を行う巫女とみなされていたとも考えられる。

忠度のみでなく、腕が祭祀される空間は水辺に存在することがままあるようだ。

水辺の腕切りといつて思い起こされるのは、屋代本『平家物語』「剣巻」の渡辺綱の鬼の腕切であろう。渡辺綱が一条戻橋で出会つた艶なる女を求められるままに掻き抱き女を五条の渡に送ると、女は、実は行き先は五条ではなく愛宕山だと言ひ出し、綱の髻をつかんで乾の方角に連れて行こうとする。そこで、

綱ハ兼テ心得タリケレハ、少モ不驕、此料ニコソ持タル劍

ナレハ、帶タル鬚切ヲサト拔テ、空様ニ鬼ノ手ヲ切ル。キリツレハ、綱ハ北野ノ社ノ廻廊ノ上ニ動トソ落タリケル。鬼ハ手乍被^レ切、アタコノ山ヘ向テ飛行クコソ怖シケレ。

と綱は鬼の腕を切り北野社の回廊の上に落とされ、綱は安部清明に七日の謹慎を申しつけられる。謹慎して既に六日が過ぎた最後の晩に急に養母が訪ねてきたことに対して綱は明日まで待つよう頼んだものの、鬼である養母は、切々と綱の不孝を訴え、その日のうちに腕を取り返す。渡辺綱による鬼の腕切譚は謡曲や御伽草子にも採用されており、広く知れ渡っている。各地にもそれを受けた伝承が数多く残されている。

鬼以外で注目すべきなのは河童の腕切伝承である。悪戯を仕掛けた河童の腕を切り持ち帰ると、夜枕元に河童が来て腕を返してほしいと請う。切られた腕など取り返してもどうしようもあるまいと言うと、河童は自分は切られた腕を接ぐ秘薬を持っている、もし腕を返してくれば、対価としてその秘薬を渡すと申し出る。それに応じると取引先の一家は河童の妙薬によって裕福になるという話型であり、河童の登場する場所は川辺や厠などである。

一例として、茨城県常陸行方郡芹沢村の手奪川の伝承を挙げよう。文化四年（一八〇七）成立の『水府志料』の行方郡「手奪川」の項に、記されている。芹澤隠岐守俊幹が野田村、鷺沼村から芹澤、捻木両村の間を流れる手奪川にかかる橋を渡る時馬の尾に何物かがとりついたので切り落とすとそれは河童の腕であった。その夜俊幹の枕元に河童が来て、腕を返せば、代わりに金瘡骨妙

薬を渡すという。河童の腕を返した芹澤家には代々金瘡家伝の妙法が伝わった。河童の死後、その体を手奪川の流れを逆流し、與澤の池にとどまったことから、祠を建て手接明神として祀り、水旱や疫疾に効があつたという。この伝承で興味深いのは、河童が登場するのは川沿いであり、その死後も川を遡り屍が池に留まつたことである。河童腕切伝承ではこのように水辺において腕を切られるものが多い。

では、なぜ鬼や河童が腕を切られるのであろうか。

近藤喜博は『日本の鬼』の中で鬼の腕を切る渡辺綱の渡辺党が水霊への呪術を行う一族であることを論証した上で、

ここで古代において水神河神とは何と考えられ、信じられていたかというに、綱の鬼退治したり、斬つたりした鬼類どもが、虚空に昇つたり閃光を発したりする点から考え、その原質は雷神によるものでなくてはならなかった。だから芥川に女をすえた男も、弓矢をもつて外をまもり、鬼の腕を格蔵している綱も、部下達をして虚空に矢を射せたりするのだった。しかし雷電は虚空の猛威であつても、それは地上の水波にもとづいて循環している。ここが大きな着眼点で、しかもその水には河や海の水霊が考えられ、そうした水霊の姿は人々を悩ますと信じられたミズチであり、蛇類でもあつて、これが雲を起し雨を降らせたる根源とされた。

と鬼に水神としての性質があることを考察している。「鬼」という存在がその性質において水の霊的な部分を多分に持つものだと

したら、ここに河童との共通点も考えられる。

河童は水の精霊であり、水を恵むこともあれば水により命を奪うと怖れられた。地方により呼び名は違ふが九州南部などにおいては「水神」と呼び習わされることもある。柳田国男氏は「河童駢引」⁽⁴⁾の中で、

河童ノ威風ノ最モ行ハレ居タル南部九州ニ於テハ、水神ト云ヘバ即チ河童ノコトナリ。田畠収穫ノ季節ニハ地面ノ西方ヲ一鎌ダケ刳残シ、之ヲ其水神ニ供フル慣習アリキ。肥後ノ北部ニ在リテハ河童ヲモ水辺ニ祭レドモ水神ハ河童ニ有ズ。毎年ノ夏畠ノ初物ヲ串ニ挿シテ溝川ノ堤ナドニ立テ、置ク。此モ亦水神ノ信仰ニ基クモノナレドモ、此ハ寧ロ河童ニ對抗スベキ勢力トシテ之ヲ祭ルガ如シ。但シ河童モ水ノ神モ共ニ鉄類ヲ忌ミ、水神ノ供物ト河童ノ供物トノヨク相似タルヲ見レバ、本来一ツノ神ノ善惡両面ガ双方ニ対立分化シタルモノト解スルモ必ズシモ不自然ナラズ。

と述べられている。河童にもやはり水神の要素があつたのである。

河童伝説の盛んな地として知られる福岡県久留米市田主丸町の観音寺には「牛鬼の手」が伝えられている。小馬徹氏は「牛鬼の手」とその由来譚が後世の「河童の手」ならびにその由来譚の先駆形態であつたと捉えられ、どのようにして鬼から河童に転換していったかについて両者ともに水神としての性格を持っていたことを指摘しつつ詳細な考察をされている⁽⁵⁾。鬼、牛鬼

と河童をつなぐものとして手や腕に対する信仰があつたとするならば、水辺に祭祀されるものと腕とのかかわりも多分に予測できるだろう。腕を祭祀される場が常に水辺であつたのは、その祭祀される腕が個の性格というもののみではなく、鬼や河童に類するような水の神の信仰も集めていくからだと考えられるのである。なおかつ、明石腕塚の祠はかつて護穀神社の境内にあつた弁財天の祠と習合させたものだといひ、忠度の腕は水辺に祭祀される弁財天と重なるものとしてみなされていたものだと考えられる。熊谷元直の腕を持ち帰った妻蛇姫の名に巫女性が擬せられることなどを考え合わせると、腕を祭祀する場に渡辺党の綱のような水辺の祭祀をつかさどるシャーマンが腕塚の信仰を支えていたことも考えられる。

また、鬼や河童という異のものと最初に接触する場として橋がたびたび登場する。特に屋代本で登場する一条戻り橋が特に橋占などが頻繁に行われた非日常の空間である境界として強く意識される場所であつたことと、両馬川にかけられた往還板橋概念的に近似した位置づけにあつたのだと推測される。境界地に身体の一部を埋めたとされる塚がある現象は日本各地に見受けられる。しかし、それが「腕」であり、境であると同時に水辺の地に埋められる現象は、綱による鬼の腕切以降受け継がれた水神の腕の祭祀の系譜に連なるものであつたのである。水神は当然一面として疫神としての性格も持ち合わせる。忠度の御霊として祭祀され疫神としてみなされる性格が腑でなく腕に宿るのは、腕にこそ鬼や河

童の水神的性格が投影されるからであろう。

おわりに

本稿では明石の忠度腕塚伝承について論じてきた。近世以降明石で諸衆の信仰を集めてきた忠度の腕塚が、付近の忠度塚よりもむしろ御霊として祭祀される武將の魂としての性格が強くみられること、かつその伝承が常に両馬川という水辺に根付いていたことに着目した。同時に腕塚があった明石は水陸両面の境界地であり、盲僧が足をとめる地であった。忠度の腕塚はそうした水辺の腕切の様相をかもしつつ、海のかなたから流れつくものを祀る地に位置した。こうした原風景を持つ明石において、忠度の腕がなぜ祭祀されていったかということに、水辺に腕を祭祀するという習俗はむしろ渡辺綱による鬼の腕切譚や河童の腕切に代表されるように、疫神という性格を持つ水神の系譜に連なるものであったことを考察した。忠度の腕切譚は鬼や河童のイメージと結びつきながら醸成されていったのである。

街道沿いの境界地であり、葬送の場でもあり、シャーマンの集まる地であった当伝承地において忠度の腕が祭祀される精神風景は、水の神である鬼や河童の腕を切る話型が基盤となっており、現在にいたるまで忠度の伝承は当地で語りつがれている。腕塚の伝承は近世までしかたどることができず、平家物語そのものに影響を及ぼしたとはいえない小規模な伝承である。であったとして

も地方の小さな祠に平家物語あるいは鬼・河童の腕切と重ねあわされる腕切伝承、さらには異地のモノが祭祀される場の問題が重層的に絡み合いながら忠度腕塚伝承が語られてきたことは、地方の伝承の問題を捉える上で重要な位置にあると考えるのである。

注

- (1) 本稿で扱った『平家物語』諸本は、以下のとおりである。
覚一本『日本古典文学大系『平家物語』下巻(梶原正昭・山下宏明校注、一九九三年一〇月、岩波書店)、百二十句本『新潮日本古典集成『平家物語』下巻(水原一校注、一九八一年一二月、新潮社)、屋代本『『屋代本高野本対照平家物語』第三卷、麻原美子・春田宜・松尾葦江編、一九九三年六月、新典社、延慶本『『延慶本平家物語』本文編上・下(北原保雄・小川栄一編、一九九〇年六月、勉誠社)、四部合戦状本『『訓読四部合戦状本平家物語』(高山利弘編、一九九五年三月、有精堂、盛衰記』『新定源平盛衰記』第五卷(水原一考定、一九九一年二月、新人物往来社)、南都本『『南都本・南都異本平家物語』下巻(一九七〇年一月、松本隆信校訂、汲古書院)、中院本『『平家物語(中院本)と研究』(高橋貞一編、一九六二年二月、未刊国文資料刊行会)、關靜録』『源平關靜録』下巻(福田豊彦・服部幸造編、二〇〇三年三月十日、講談社)

- (2) 北川忠彦『忠度像の形成』(『国学院雑誌』第七十六卷

第九号所収、一九七五年九月一日、国学院大学

京国立博物館蔵

- (3) 小山弘志・佐藤健一郎編『謡曲集』新編古典文学全集
第五十九卷（一九七七年五月、小学館）

- (4) 村尾一風・山田博有『福原びんかゝみ』（延宝八年（一

六八〇）。『須磨寺御開帳古俳書集 福原鬘鏡・太夫櫻』

大谷篤藏編、一九八四年九月、ジュンク堂書店

- (5) 仲彦三郎『西摂大観』郡部（一九二一年一月、明輝社。『西摂大観』郡部（縮刷版）、一九六五年八月所収）

- (6) 秋里離島『摂津名所図会』（寛政八年（一七九六）。『摂津名所図会』第三卷、一九八四年一月、新典社）

- (7) 村上石田・中井藍江『播磨名所巡覧図会』（文化元年（二八〇四）。『播州名所巡覧図会』井口洋編、一九七四年一月、柳原書店）

- (8) 落合長雄『神戸市小字名集』（『歴史と神戸』第十八卷第四号、一九七九年八月一日、神戸史学会）を参考とした。

- (9) 『播州明石城図』（大久保時代（二六三九―四九）。『講座明石城史』二〇〇〇年三月、明石市教育委員会）

- (10) 『摂津名所地図』（寛文七年（一六六七）、神戸市立中央図書館蔵）

- (11) 『海瀬舟行図』（寛文七年（一六六七）、延宝八年（一六八〇）衣斐蓋子写図、神戸市立中央図書館蔵）

- (12) 太田小左衛門『采邑私記』（元禄五年（一六九二）、東

- (13) 橋本海関『明石名勝古事談』（一九一七年二月、『明石名勝古事談』一九七四年七月、橋本海関、中央印刷所収）

- (14) 『播磨鑑』（『播磨鑑（全）摂陽群談（上）』上巻、一九六九年一月、歴史図書社）

- (15) 白洲正子『謡曲平家物語』（一九九八年二月、講談社）

- (16) 『文久三年明石町田全図』（神戸市立中央図書館蔵）

- (17) 金井智『明石の誕生』（一九八〇年九月、自費出版）

- (18) 三木通識『播磨諸所随筆』（延享五年（一七四八）。『播陽万宝智恵袋』巻之十九、天川友親編、宝暦十年（一七六〇）。『播陽万宝智恵袋』上巻、八木哲治校訂、一九八

八年二月、臨川書店所収）

- (19) 前掲注（13）に同じ。

- (20) 花部英雄『人丸信仰と呪歌』（『呪歌と説話―歌、呪い、憑き物の世界―』一九九八年四月、三弥中書店所収）

- (21) 斉藤真編『明石の風物Ⅱ』（一九六五年十一月）

- (22) 田中久夫『伊予河野氏と平氏と明石海峡―大蔵谷の稲爪神社と舞子の山田浦を中心に―』（『御影史学論集』第

二十九号、二〇〇六年十月）

- (23) 大森亮尚『柿本人麻呂外伝―明石人丸神社と早良廃太子、及び万葉集成立をめぐる―』（『山手国文論集』第一号、一九七八年三月）

(24) 鈴木祥一「八木町内の宝篋印塔その他」(『郷土誌八木』第八号、一九九六年三月、八木史談会)

(25) 吉田証「ふるさと 口丹波風土記」(一九六八年一月、丹波史研究社)

(26) 『英雄・怨霊 平将門と史実と伝説の系譜』(二〇〇三年五月、千葉県立大利根博物館)

(27) 『わたしたちのまち可部』(一九八九年七月、三人・可部・亀山公民館発行)

(28) 『日本昔話通観』で見ると、秋田県、宮城県、福島県、群馬県などにこの類話が見られる。それらは酒天童子説話と融合しながらも、鬼の腕を取り返すところに主眼が置かれているのが興味深い。『日本昔話通観 秋田』(稲田

浩二・小澤俊夫編、一九八二年一〇月、同朋社)、『日本昔話通観 宮城』(稲田浩二・小澤俊夫編、一九八二年四月、同朋社)、

『日本昔話通観 福島県』(稲田浩二・小澤俊夫編、一九八五年五月、同朋社)、『日本昔話通観 栃木・群馬』(稲田浩二・小澤俊夫編、一九八六年四月、同朋社)

(29) 小宮山楓軒『水府志料』(文化四年(二八〇七))。『茨城県史料 近世地誌編』一九六八年三月三十一日、茨城県

(30) 近藤喜博「鬼の文化史」『日本の鬼―日本文化探究の視角―』(一九六六年九月、桜楓社)

(31) 柳田国男「河童駒引」(『山島民譚集』一九一四年七月、甲寅叢書刊行所初出、『柳田国男全集』第二巻、一九九七

年十月二〇日、柳田国男、筑摩書房所収)

(32) 柳田国男「河童駒引」(『山島民譚集』一九一四年七月、甲寅叢書刊行所初出、『柳田国男全集』第二巻、一九九七年十月二〇日、柳田国男、筑摩書房所収)

追記 本稿は卒業論文として執筆したものを伝承文学研究会関西例会(平成十九年五月)、立命館大学日本文学会第五十一回大会での口頭発表を経て、大幅に加筆修正したものである。ご教示くださいました諸先生方、それぞれの地域での実地調査・資料調査で、ひとかたならぬご厚情と貴重な御教示をくださいました、神戸市立中央図書館の方々、木村英昭氏をはじめとして、ご当地の皆様方に、末筆ながら厚くお礼申し上げます。

(おおつば・まい 本学博士前期課程)